

## 基幹型共同研究プロジェクト

### 「日本語変種とクレオール形成過程」

#### 接触言語学の現場から

真田 信治

#### 《研究の概要》

本プロジェクトでは、アジア太平洋の各地に居住するかつての日本語学習者がどのような種類の日本語を維持、運用しているのかを明らかにすることを第1の課題とした。その研究成果は、言語の習得・維持・消滅にかかわる研究に幅広く貢献するはずである。特に、半世紀以上にわたる第二言語の維持といった事象を取り上げて研究対象としたものは世界的にもほとんど例を見ない。その点でも、本プロジェクトでの研究成果は学術的・社会的に重要な意義を持っている。

さらに、本プロジェクトでの第2の課題は、台湾東部の宜蘭県に住むアタヤル人とセデック人が用いている、日本語を語彙供給言語とするクレオール語の解明である。言語接触の結果として生まれたクレオールをめぐる研究は、言語の変化や言語の普遍性に関して、主に欧米諸語を基盤としたクレオール語が取り上げられるのが一般的であった。これまでのクレオール研究で取り扱われた言語の類型・系統とは異なる、この日本語を上層とするクレオール語の解明は斯界に貴重な研究事例を提供するものである。

共同研究者 7名

#### 《主要な成果物》

##### 編著書

- ① Daniel Long & Keisuke Imamura with assistance from Masaharu Tmodrang. Shinji Sanada, Supervising Editor "The Japanese Language in Palau." Printed and Distributed by Shinji Sanada (NINJAL, 2013.9) 130p <http://www.ninjal.ac.jp/research/project/a/creole/creole-de-tail/> <電子成果物>
- ② 朝日祥之著、真田信治監修 『サハリンに残された日本語権太方言』（明治書院、2012.10）158p
- ③ ダニエル・ロング、新井正人著、真田信治監修 『マリアナ諸島に残存する日本語—その中間的言語的特徴—』（明治書院、2012.4）172p

- ④ 簡月真著、真田信治監修 『台湾に渡った日本語の現在—リンガフランカとしての姿—』（明治書院、2011.9）162p

##### 資料集

- ① 真田信治編 『ミクロネシア・サイパン残存日本語の談話データ』（国立国語研究所・真田信治、2011.3）151p
- ② 真田信治・朝日祥之・金美貞編 『サハリンに残存する日本語の談話データ』（国立国語研究所・真田信治、2012.2）122p

##### 論文（日本語系クレオール語に関するもののみ）

- ① 真田信治、簡月真「宜蘭クレオール」（「国語研プロジェクトレビュー」3-1, 38-48）国立国語研究所 2012
- ② 簡月真、真田信治「台湾の宜蘭クレオールにおける否定辞—『ナイ』と『ン』の変容をめぐって—」（「言語研究」140, 73-87）日本言語学会 2011
- ③ 簡月真、真田信治「東台湾泰雅族的宜蘭克里奧爾」（「台湾原住民族研究季刊」3-3, 75-89）東華大学原住民族学院 2010
- ④ Chien, Yuehchen and Sanada, Shinji "Yilan Creole in Taiwan." *Journal of Pidgin and Creole Languages* 25:2, 350-357. John Benjamins Publishing Company. 2010

#### 《特色ある活動》

- ① パラオ共和国の教育文化省との共催でパラオ・コミュニティカレッジにおいて、2012年6月、共同研究員以外の研究者等の参加も得て、国際シンポジウムを開催した [http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/~long/Palau\\_Symposium\\_Report.htm](http://nihongo.hum.tmu.ac.jp/~long/Palau_Symposium_Report.htm)
- ② 中国の延辺大学外国語学院の研究者と連携し、2012年9月、若手研究者の参加も得て国際共同研究発表会を開催した。『国際共同研究発表会要旨集：多言語社会の中の日本語』（中国 延辺大学、2012.9）

## 《何が分かったか、何が出来たか》

まず、第1の課題とその研究成果について述べる。

●日本語の長期的維持とその習得環境について：植民地・支配地で行われた戦前・戦中の日本語教育はどのようなものだったのか。また、日本語習得環境はどのようなものだったのか。

⇒考えられる要因には、次のようなものがある。

①習得開始の年齢が8歳前後の言語形成期間中であったこと。習得のあるレベルを超えると第二言語は衰えないと言われるが、当該地域の日本語話者の多くはすでにこのレベルを超えていたものと思われる。②これら地域の日本語が外国語ではなく彼らの第二言語であり、母語話者が多数居住していたこと。③学校での教育がすべて日本語で行われ、学校で日本語以外の言語を話すことが罰が与えられたこと。

●日本語の社会的役割について：地域の言語生活において、当時の日本語が果たした社会的な役割はどのようなものだったのか。また、その後あるいは現在、日本語が果たしてきた／果たしている社会的な役割はどのようなものなのか。

⇒当時、社会で活動するためには日本語が前提となっていた。そして、学ぶ側にもその要求が（強制されたものであったとしても）存在した。戦後は、台湾やミクロネシアなどで異なる母語を異にする人々の間でのリンガフランカとして用いられ続けている（台湾の一部ではクレオールが形成された）が、それ以外には日本語はどの地域においてもほとんど運用されず現在に至っている。（ただし、台湾の原住民族諸語やミクロネシアの諸言語にはかなりの日本語が借用されている。）

●日本語変種の特徴について：日本が撤退して数十年が経過したが、現在これらの地域に居住する、かつての日本語学習者たちはどのような種類の日本語を維持しているのか。

⇒これらの地域の話者が話す日本語には、言語としての合理化（簡略化）が進んでいる。また、現地音からの転移がそれぞれの日本語を彩っている。なお、居住していた母語話者の出身地とのかかわりで、台湾日本語は九州方言をベースとしたものになっており、マリアナ諸島の日本語はウチナーヤマトゥグチをベースとしたものになっており、サハリンでの日本語は北海道方言をベースとしたものになっている。ただし、日本語能力に関しては、話者による個人差が各地ともに著しい。

次に、第2の課題、日本語系クレオール語（「宜蘭クレオール」）の実態に関して明らかにし得た点について述べる。

●日本語系クレオール語（「宜蘭クレオール」）について：

⇒台湾宜蘭県の一部地域において、かつての日本植民地統治とともに台湾に渡った日本語と現地のアタヤル語／セデック語との接触によって形成された新しい言語が話されている。が、その存在も使用実態も最近までほとんど知られていなかった。本プロジェクトでは、この言語が日本語を語彙供給言語とするクレオール語であることを検証しつつ（「宜蘭クレオール」と命名）、そのアウトラインを記述した。宜蘭クレオールは、宜蘭県の大同郷寒溪村と南澳郷東岳村・金洋村（の博愛路）・澳花村で主に使われている。この4つの村の住民たちは、かつて山の中に散在し、狩猟採集を中心とした生活をしてきた。その後、日本植民地当局は、1910年代から、宜蘭地域においても原住民族集団移住政策を推進した。山中で暮らしていた人々を支配しやすくするために、交通の便のいいところに集住させるという政策である。その過程で、同じ地区にありながらも個別に生活していたアタヤル人とセデック人が新たな集落にまとめられたのである。ちなみに、1930年代における宜蘭地域の人口比率は、アタヤル人85.7%、セデック人14.3%である。宜蘭クレオールにセデック語の影響が少ないのは、このようにセデック人がマイノリティであったことが関与していると考えられる。東岳村のケースでは、住民が現在の地に移り住んで共同生活を始めたのは1913年からのことであるが、その2年後の1915年に「教育所」が設置され、この地で日本語教育が始まった。互いに通じ合わない異なった言語を使用するアタヤル人とセデック人が、コミュニケーションをとるために、その「教育所」で、あるいは日本人との接触のなかで身に付けた簡略な日本語を互いのリンガフランカ（共通言語）として使い始めた。その過程でアタヤル語の要素が混じったハイブリッドな言語が形成されたと推測される。そして、その言語を第一言語とする世代が生まれ、後、それが継承され、言語体系を再編成しつつ発達したのである。その発達の最大の要因は、日本の敗戦によって日本人が撤退し、日本語母語話者による影響が途切れたことに求められる。